



へき地医療現場で見いだされた6つの疑問とその解決に向けた研究の取り組み

山口県立総合医療センター へき地医療支援部 中嶋 裕 (山口県 25 期)

この度、自治医科大学大学院医学研究科論文博士の学位審査を経て、学位を取得することができました。そこでご縁あって、地域医療オープン・ラボ News Letter への寄稿をお声かけ頂きました。研究をやったことはないけど、ちょっと意識しているような義務年限内の若手の先生に向け、私自身の経験と学位論文の概要、研究の取り組み方の一例を提示できればと思います。



学位論文は、“へき地医療現場の経験に基づく疑問をそれぞれに対して研究を行い、6つの研究を通じて『研究の取り組み』”というテーマでまとめました。その疑問のほとんどは、義務年限内のへき地勤務時代に経験したものでした。そして、正直に言うと…色々悩み四苦八苦した中で、少しでも解決したく研究として取り組んだものです。へき地、特に一人で診療していると壁に当たった時、環境などの外的要因が原因なのか、それとも自らの力不足が原因なのか、段々と分からなくなることがありました。振り返れば、恐らくどちらの要因も関係していたのだと思いますが、一人で煮詰まってくると、どちらか一方へ極端に原因を求めてしまうこともありました。そういった悶々とした思いを、ちょっと客観的に眺めることができた研究は、自分にとっては大きかったように思います。

学位論文の“はじめに”に載せたのですが、「2006年に自治医科大学医学部卒業生を対象として、学位取得状況に関する調査が実施され、その結果が地域医療オープン・ラボ News Letter 2006において報告されています。学位取得を希望しているにも関わらず実際に研究を開始しているのは半数以下でした。」自治医科大学卒業生が多く勤務するへき地医療機関では、臨床研究の実施が難しい状況にあります。

学位論文で述べた研究の詳細はここでは示しませんが、6つの疑問を以下の表1に示します。それぞれの研究動機には、今でも鮮明に思い出せる色々な思いがありました。その一つ一つが自分自身のモチベーションになりました。

表1. 6つの疑問とその研究

1) 地域住民が求めるへき地診療所医師の診療技術は何か？ 中嶋 裕, 志水元洋, 原田昌範, 宮野 馨, 福富基城, 吉田奈緒美, 石丸泰隆, 岡村 宏: へき地診療所医師に地域住民から求められる診療項目-自己記入質問票を用いた横断的研究. 月刊地域医学. 2010, Vol.24, No.3, p.19-23.
2) 肺炎球菌ワクチンは、離島高齢者の緊急搬送を減らせるか？ 中嶋 裕, 原田昌範, 石丸泰隆: 離島における高齢者の肺炎球菌ワクチンの有効性の検討. 日本プライマリ・ケア連合学会会誌. 2011, Vol.34, No.2, p.108-114.
3) 離島の保護者の抱える、子どもの病気への不安は何か？ 中嶋 裕, 原田昌範, 村上順一, 佐々木典代, 西村 仁, 志水元洋, 岡村 宏: 離島において子どもが病気の時に抱える親の不安-自己記入質問票を用いた横断的研究-. 月刊地域医学. 2010, Vol.26, No.11, p.10-16.
4) 高齢者は、積極的に心肺蘇生講習会へ参加できないか？ ① 中嶋 裕, 原田昌範, 村上順一, 岡村 宏, 若松弘也: 日本蘇生学会雑誌. 離島において子どもが病気の時に抱える親の不安-自己記入質問票を用いた横断的研究-. 蘇生. 2011, 第30巻, 第2号, p.89-92. ② 中嶋 裕, 原田昌範, 村上順一, 岡村 宏, 若松弘也: 高齢化が進む地域における心肺蘇生攻守会受講生の救命意識とその前後変化. 月刊地域医学. 2011, Vol.25, No.4, p.50-54.
5) へき地医療機関の糖尿病診療は、どんな違いがあるのか？ 中嶋 裕, 福田吉治, 原田昌範, 中森芳宣: へき地医療機関における糖尿病診療の横断的研究-HbA1c値、使用薬剤の割合、若手医師が診療で感じる困難さ-. 日本プライマリケア連合学会会誌. 2012, Vol.35, No.3, p.204-208.
6) 簡便な手技で予防接種の痛みを軽減できないか？ Yutaka Nakashima, Masanori Harada, Masanobu Okayama, Eiji Kajii: Analgesia for pain during subcutaneous injection: effectiveness of manual pressure application before injection. International Journal of General Medicine. 2013, 6:817-820.

学位論文の“まとめ”では「世界的な流れとして、プライマリ・ケアに関する研究議論の推進が謳われており、実際2000年代に専門学会の活動が活性化し、さらに学会誌に発刊されるに至っています。日本の現状をみると、臨床研究を実施するための教育が体系化されているとは言い難く、臨床研究の推進力を得るためには、教育環境の充実を図ることが緊急の課題と考えられる。」と示しました。確かに全国的な体系化はまだまだかもしれないです。しかし、私自身が義務年限を経験した2002年以降のおよそ10年間で臨床研究に関する各種学会やセミナーでの取り組みの機会は多くなったように思います。中々1回では分かりにくいこともあるかもしれませんが、少しまとまった合宿形式のセミナーを複数回受講することで段々と掴めてきます。また可能であれば、そういった受講の際には自分が研究をやっているつもりで（やっているものを持参して）、受講すると内容がスッと入ってくることも多いです。

今回、一番お伝えしたいことは、まず研究を考えている段階から経験のある人に相談し、指導を受けるということです。学位取得には研究歴が必要となるため、私は自分の興味また色々なご縁があり、自治医科大学地域医療学センターの研究生になり指導を受けました。また、自治医科大学には“CRST;地域医療研究支援チーム(Clinical Research Support Team in JMU)”もあり、相談すれば指導を受けることができます。この指導を受けるということは、実際に研究に取り組んでみないと少しピンとこないかも知れませんが、ここが一番大事です。骨格となる研究デザインや踏み外してはいけない倫理性などは、最初は分かりにくい所や間違っただ道に気づかずに進んでしまっていることがあります。研究には、道しるべの存在は不可欠です。もう一度述べます。まず研究を考えている段階から経験のある人に相談し、指導を受けて下さい。

私は学位論文を以下のように締めました。「今後の展望として申請者自身の研究で得られた経験を活かし、特にへき地勤務を行う義務年限内若手医師への指導・教育に取り組みたい。申請者が出会ったように臨床から得る疑問の一つ一つが研究に繋がるというきっかけを伝えたい。そして研究には指導者が必要であり、モチベーションを維持するための仲間の存在の重要性についても伝えていきたい。」できることは少ないかもしれませんが、次に活かせるアドバイスがあれば是非していきたいと思っています。私自身、山口県のへき地医療（主に仕組みやサポート側）に携わっています。直接お目にかかる機会は少ないかもしれませんが、山口県の自治医大卒業生に限らず、へき地医療を中心に臨床、研究またよろずなんでも…意見を聞いてみたいなどできることがありましたらお声かけ頂けると幸いです(E-mail nakashima.yutaka@ymghp.jp)。



！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp